

歴史的・社会的文脈の中で 心理学をとらえる

渡邊 芳之, 小塩 真司

2015年12月28日発行 (Ver. 1.0) ●発行元: ちとせプレス

心理学において次々と新しい研究が登場し、知見が積み重ねられています。そうした現在の心理学を大きな歴史的・社会的文脈の中で見ていくと、何が浮かび上がってくるのでしょうか。日本パーソナリティ心理学会との共同企画として、特にパーソナリティ心理学に関連する論点に焦点を当てつつ、理事長の帯広畜産大学の渡邊芳之教授と常任理事の早稲田大学の小塩真司教授にお話を伺いました。

Section 1

心理学の地図と学会

渡邊芳之 (以下, 渡邊): 澤幸祐先生⁽¹⁾によると、今田寛先生⁽²⁾が日本心理学会⁽³⁾に今日来られていて、心理学の地図が書けないとおっしゃったらしい。私も久しぶりにポスター・セッションに行ってみて、ひと通り見たんだけど、知り合いの研究は何となくわかるけど、心理学ワールドが大きくなっちゃって、その中で自分がどこにいるかが昔ほど簡単にわからないなど。自分もわからなくなっちゃうし、まして若い先生方は本当にわからないんじゃないかな。また、昔ほど自分の指導教官からそういうことを意識させられもしないかなと思った。そのあたりのことを学会とかが、そういうイメージをもてるような材料を提供するみたいなことができれば面白いのかな。

いまであれば、本や論文の形だけでなく、ウェブに掲載しているいろいろな人に伝えていくということもできる。

小塩真司 (以下, 小塩): 学会のことでいうと、日本の場合はそれぞれの雑誌が焦点化していないじゃないですか。

渡邊: 同じようなものがいろいろなところ載っているんだものね。

小塩: パーソナリティに関する研究が『パーソナリティ研究』⁽⁴⁾だけじゃなくて、『心理学研究』⁽⁵⁾にも『教育心理学研究』⁽⁶⁾にも載るし『社会心理学研究』⁽⁷⁾にも載るし。本当は雑誌に合わないものはリジェクトしてくれればいいですよ。それぞれがちゃんと焦点をはっきりさせてくれば。そうしないと、本当は独自性が出ないと思いますけどね。こういう研究だったら『パーソナリティ研究』だなど、みんなが集まってくる。

渡邊: 昨日も『心理学研究』の審査の話が出て、『心理学研究』では、そのテーマについて必ずしも専門じゃない人がたくさん査読者になっていて、ということを行っている人がいました。パーソナリティの分野についてもその傾向はあるよね。『パーソナリティ研究』の方が審査が厳しくなっているかもしれない。いまのところステータスとしては『心理学研究』の方が上だから、賢い人はそっちに出すよね。すでに掲載されている論文も『パーソナリティ研究』に来たらいろいろコメントがついたかもしれない。焦点化というのも掲載する論文ではなかなかできないかな。

小塩: 海外では本当にデスク・リジェクト⁽⁸⁾が多いので。これはうちの雑誌には合わないと思ったら審査には回りませんね。質の低い論文もそうなりますけれど。

渡邊: 『パーソナリティ研究』でも意外とやっているよ。そんなにたくさんではないけれど。ときどき、明らかに全然パーソナリティじゃない論文が来るんだよね。どこでもいいから出そうとしているのか、個人

差がまったく扱われていないものがときどき来る。それでもまあ、それ自体は個人差を扱っていないけどイメージとしてそのことの個人差がパーソナリティにつながるものについては大目に見ているけど、どう考えてもつながらないようなものがときどき送られてくる。ただ『心理学研究』はそれがないわけだね。心理学であればそれはリジェクトしないわけだ。

小塩：『心理学研究』と『教育心理学研究』は基本そうですね。ただしあまりに質の低い論文に関しては、編集委員長や副編集委員長レベルの判断で行われることはあるかもしれません。

渡邊：小塩先生は見た覚えあるかな、むかし俺が編集委員長をやっていたときだけ「ドライな性格とウェットな性格」というのを気体と液体の物理的(?)な性質から理解しようという論文がきて、すごく面白かったからずいぶん苦労して掲載まで持っていったんだけど、今回の日本心理学会の発表なんか見ているとある意味似たようなものがあるんだよ、脳かなんかの研究で、物質のイメージみたいなものと個人差を結びつけてといったことが、もう少しまともにやられている。そういう意味ではその論文が載った5~6年前にはトンデモ研究と言われかねなかったようなものが、今は堂々とできるようになっているんだよね。

小塩：そうですね。

渡邊：今回、澤幸祐さんたちのシンポジウムでもあるけれど、動物と人間のコミュニケーションというネタだってさ、10年前にそんなこと言ったら、そんなもの研究できるわけがないだろうと言われたと思うけど、それができるようになった。日本のソフト分野の心理学なんて進化していないと言われがちだけど、すごく進歩している。10年前とほんとに若い人がやっていることは違うし。

そういうわけで、さっき言った心理学のマップの中に自分がどこにいるかを若い人にイメージしてもらうための古い話と、そのマップがいまどう広がっていて、どういうふうに解像度が上がっていったりしているのかという新しい話が1つの流れの中でできるといいかなど。小塩さんは新しいことをたくさん知っているから、パーソナリティ心理学の昔とか過去のことをいま現在の新しいものとのつなぐテーマを設定して、俺は小塩さんからこんな新しい研究があるというのを教えてもらい、俺はそれが昔もあったじゃないかという話を

していくと、いくつかテーマを選んでできる。1つ大きなテーマとしては、「変わるもの変わらないもの」というのがすごく大きなテーマとしてある。

無意識、脳、倫理

渡邊：もっと小さなテーマとすれば、いまは無意識だよ。今回の日本心理学会で今日見ただけでも各分野1つずつぐらいある。無意識や非意識、あとIATみたいのだと潜在というのか。

小塩：バナージ⁹⁾も来ていましたよね。

渡邊：この前の『社会心理学研究』に自由意思のレビュー論文が出たよね。これは社会心理学のテーマなのね、自由意思の問題って。すごいよ、社会心理学って。いつの間にか自己って社会心理学のテーマになっているし。我々が院生の頃、社会的認知の研究がおおよそ行きわたったところで、社会的認知をやっていた人が次のテーマとして自己に入っていた。日本でも研究者が移っていった。

小塩：バウマイスター¹⁰⁾の流れがありますね。その後、セルフ・レギュレーション(自己調整)ですね。

渡邊：中心にいるような人たちにはマップがあるのだろうと思う。バウマイスター先生には多分マップがあって、彼はどこかに向かって歩いているけど、それを追いかけている人たちにはその地図が見えていないと思う。今日も、とある心理学者と話していたんだけど、潜在意識と言っている人たちはフロイト¹¹⁾の著作を読んでいるのかね、という話をしている。もちろん読んでいる人もいると思うけれど。自分たちの研究の直接の祖先だとは思っていないと思うんだけど、俺なんか見るとついにフロイトが科学的な心理学に戻ってくるぞ、というイメージで見えるんだよね。そこは小塩さんから見てどうですか。フロイトの見直しになるの、全然違うものなの。

小塩：アイデア的には同じようなことをやりたいんだと思うんですけど、やり方が違う感じがあって。どうやったら受け入れられるかということ、工夫してきているように思うんですよね、それぞれの時代に。

渡邊：フロイトはその当時の蒸気機関のような、無意識の中に蒸気がもち込まれているイメージをもって

いた。蒸気が押し込まれると、すき間があるとそこから吹き出すわけだが、夜に寝ているときというのは抑えが弱い状態だから蒸気がシューシュー抜けてくる。そういうイメージでとらえていた。

小塩：あまりに抑えつけると爆発する。

渡邊：フロイトが蒸気機関だったものが、いまは脳になっている。フロイトはいま生きていたら、彼は医者だったから脳の話をしていたと思う。

小塩：脳のメタファは、コンピュータ・モデルからネットワーク・モデルになっている。メタファも変わってきています。

渡邊：もう計算のモデルがないものね。だからそんなような絵が描けると面白いじゃない。パーソナリティに限らず。

小塩：あとポジティブ心理学が出てきてから、ポジティブ方向とネガティブ方向に特性がスパッと分かれてきた感じはする。それまでは個人差に関して、あまり「よい」というのをつけなかったはずなんですけど。

渡邊：これはすごく大きな文化・社会の流れだよ。いまの倫理学を見ていると、英米の倫理学では何が正しいと言い始めているでしょ。長年、人文科学は正義については語らないし哲学だって分析哲学は言葉について考えるだけでその中身についてはほとんど考えなかったけど、哲学もどうもそっちに戻ってきている。世界をどうとらえるべきかみたいなことに。倫理学は正義に戻ってくる。では心理学は何に戻ってくるのか。ただ、倫理学は昔から「よいもの」の話はしていたわけだから。心理学は昔から「悪いもの」の話しかしてこなかった。

小塩：歴史的には複合的かもしれない。心理学では、「能力」という言葉を使ってきた。能力はやっぱりポジティブ方向です。知能もそうですし。

渡邊：能力と知能に関して、心理学者はアセスメントの思想として、よい悪いは結果について評価する人が決めることで、我々は客観的にアセスメントしているだけだと言いつけてきた。そんなわけないんだ。これも倫理の問題ですよ。心理学も倫理を言わないといけなくなっている。おそらく文系諸学の中では倫理

のことを言わないと、これからは居場所がなくなってくる。心理学が倫理を言わないで客観的なアセスメントだと言いつけるには、自然科学化の方向に行かないといけない。

小塩：キャラクター (character) という単語も復活しました。

渡邊：けっこう言っているよね、キャラクターって。

小塩：もともとオルポート⁽¹²⁾ はパーソナリティ (personality) という言葉を使って、キャラクターを使わなくしていった方なので、揺り戻しが起きています。

渡邊：キャラクターは道徳的な意味がある。不思議だけど、日本人の英語感覚でいうとキャラクターの方が客観的な気がする。キャラクターのもともとの意味には「(道徳的) 特性」とか「(道徳的) 特徴」とか書いてある。明治時代に渡辺徹⁽¹³⁾ とかが人格について書いたときに、人格というのは望ましい人の在り方だった。道徳とか倫理も含めていた。「人格」という日本語の問題もすごくある。personality = 人格ではない。明治時代の話もいくつかのテーマでは見なければいけない。「変わるもの変わらないもの」から始めて、その後に脳とか倫理とか無意識の話を今度したい。

■ 文献・注

- (1) 澤幸祐 (1973-) : 専修大学人間科学部教授。専攻は学習心理学。
- (2) 今田寛 (1934-) : 関西学院大学文学部教授、同大学学長、広島女学院大学学長を歴任。現在は関西学院大学名誉教授。専攻は学習心理学。
- (3) 日本心理学会：対談は2015年9月に開催された日本心理学会79回大会の会期中に行われました。
- (4) 『パーソナリティ研究』は日本パーソナリティ心理学会発行の雑誌。
http://www.jspp.gr.jp/doc/pub_jjp.html
- (5) 『心理学研究』は日本心理学会発行の雑誌。
<http://www.psych.or.jp/publication/journal.html>
- (6) 『教育心理学研究』は日本教育心理学会発行の雑誌。
<http://www.edpsych.jp/henshuu/>
- (7) 『社会心理学研究』は日本社会心理学会発行の雑誌。
<http://www.socialpsychology.jp/journal/contents.html>
- (8) 論文が個別の査読者に回されることなく、担当編集委員によって掲載不可の判断が下されること。質が低い論文や、雑誌の趣旨に沿っていない場合に行われることが多い。
- (9) バナージ (M. R. Banaji: 1956-) : ハーバード大学教授、ラドクリフ高等研究所教授。IAT (Implicit Association Test; 潜在的連合テスト) の開発者。主著に『心の中のブラインド・スポット』など。2015年の日本心理学会大会にて招待講演を行

った。

- (10) バウマイスター (R. Baumeister : 1953-) : フロリダ州立大学教授。意志の力や自我消耗に関する研究を行う心理学者。主著に『WILL POWER』など。
- (11) フロイト (S. Freud : 1856-1939) : 精神分析学者、精神科医。精神分析の創始者で、心を意識、前意識、無意識に分けて理論を展開した。
- (12) オルポート (G. W. Allport : 1897-1967) : 初期のパーソナリティ心理学を築いた研究者の1人。パーソナリティの特性論に関する研究で有名。
- (13) 渡辺徹 (1883-1957) : 日本のパーソナリティ心理学の開拓者。

Section 2

変わるもの変わらないもの

渡邊：「変わるもの変わらないもの」は、パーソナリティ心理学が始まったときから一番大事なテーマで、かついまも大事なテーマだ。パーソナリティ心理学の歴史の中で、繰り返し「変わるもの」の方が有力な時期と「変わらないもの」が有力な時期とが現れる。変わるものは教育、訓練、コントロールですよ。変わらないものは予測だし、もっと言えば優生学だ。個人差の問題を変わらないものからとらえるのは、優生学から絶対に切り離せない。だからそこが倫理の問題になってくる。

それこそ知能の生得性が明らかになって、例えば知能の8割は生得的だなんて話になったら、いまみたいに勉強ができる・できないで人を選抜できなくなる。差別になるものね。知能の問題はいつか揺り返しが来るよ。揺り返さないと、学力で順位をつけられなくなってから。結局、その時代の時代精神の方が先にある。研究が発展して時代精神を作っていくのではなくて。変わらないものにみんなが興味がある時代と、変わるものにみんなが興味がある時代とがある。

ミシェル⁽¹⁾の本が出たときはどういう時代であったかという、1968年頃はアメリカではフラワー・ムーブメントで、みなヒッピーだったし、みんなドラックでトリップをしていた。その頃はドラックによる性格の変異が注目されていて、ドラックで性格がすごく変わってしまうわけだよね。それがまだポジティブにとらえられていた時代。変わることに對するポジティブな考えがすごく強かった。アメリカの社会も公民権運動の流れとしてよい方向に変わり、ミシエルの頭の中にも当然だけれど、状況によって変わるポジティブな人間像がくっきりとある。そのあたり、日本の心理学者は文字通り倫理フリー（倫理に関知しない）な考え

をもっていたりするよね。

小塩：この前、1970年代ぐらいに日本臨床心理学会が出した本を読みました。

渡邊：心理テストのやつね⁽²⁾。あれは読むべき本。

小塩：早稲田大学の心理学コースで捨てられようとしていたのをもらったんですけど（笑）。戸川行男先生⁽³⁾とかがやり玉に挙げられている。

渡邊：あの頃の大先生たちの右往左往ぶり。あれは学園紛争と同時に起きていた。学部では学生たちが先生をトイレに閉じ込めて自己批判させていた。大学院では、ああいうふうに、心理学の構造自体が差別的だという話になって、みんなつるし上げられていた。あの当時の記録をいま読むと、えっ、この先生がこの頃にはこんなこと言ってたの、と驚くことがたくさんある。

昔の心理学では、政治的な展開につながった問題については、その問題に関わった人の存命中はその話はしちゃいけない感じがあった。我々が血液型の話をしたとき⁽⁴⁾にすごく怒られたのは、そのときのことを知っている人がまだ生きていたんだよね。千里眼事件⁽⁵⁾もそのときに関わった人がまだ生きていた。面白いからとか言って簡単に調べにいける状態ではなかった。佐藤達哉や俺が血液型や念写を心理学史の問題としてやり始めたときどんなに怖かったかということは、歴史の証言として知っておかないと。俺なんか結婚式でも怒られたんだよ。渡邊君も所帯をもって身を固めたのであるから血液型のようなおかしなものはやめてもっとまっとうな心理学の研究を、って言われた。その先生も冗談じゃなくて本気で言っているし、俺も本気で言われたと思って恐縮していた。いまの人には想像もつかないんじゃないかな。

小塩：いまは、何がまっとうな研究で何がまっとうでないかわかんないですよ。

渡邊：わかんないよね。1990年には、まっとうな研究とそうじゃない研究があったよね。基本的には心理変数の入っていない、全部行動で定義できるものがまっとうな研究で。パーソナリティ分野でもそうだったと思うよ。完全に操作的に定義できるものしかモデルに入れることを認められなくて。いまなんか、モデルに何を入れたっていいんだもん。すごいよ。

小塩：自由ですよ。僕が院生の頃と比べても。

渡邊：この20年でずいぶん違うよね。そのこと自体はいいと思うんだけど。その概念のことをもうちょっとちゃんと考えなくていいのか、ということは常に思う。今日の発表でも気になったのはあったなあ。

■ そもそも論をどこでするか

渡邊：こういうことはまとめては書きにくい。いま、とある出版社で方法論の教科書を書こうとしているんだけど、方法論の教科書を書きたいんじゃないんですよ。方法論の教科書を書くと、当然いまのような話をすることになるでしょ。それが教科書としてどの程度需要に応えられるかはあるけれど。朝倉書店から出た『心理学方法論』⁶⁾が増刷2回目になった。信じられないよね。方法論という本だよ。方法を書いてある本に若い人が飢えていて、何でもいいから方法を教えてくれる本を読みたいんだよね。若い人が方法の本を読みたいと思うのは、1つは研究のやり方を手っ取り早く知りたいと思うのもあると思うけど、若い人に好きなことを話をさせると、やっぱりそもそも論を知りたいと言い始めるんだ。あの本はただタイトルと表紙だけで売れているとは思わなくて、ちらちらは中を見て買うわけだから、そもそも論を書いてあるから買うのだろうと思う。開いてから最初の50ページくらい1つも図表がなくて、昔の心理学者の写真しかないんだよ。それをわざわざ買ってくれるわけでしょ若い人が。だからやっぱり需要はあるので、その需要に対してどういう形でアピールして提供していったらいいのかを考える必要がある。

ネットで読めるというのはやっぱり大事。『パーソナリティ研究』は引用される度合いにおいては、『心理学研究』『教育心理学研究』に伍すくらい引用されている。なぜかというところは要はフリーアクセスだからなんだよね。検索すると出てきて読めるから、引用してもらえる。ネットで読めるのはすごく大事。もう現実、ネットにあがっていないのはないのと同じになっている。CiNii⁷⁾からPDFのリンクのついていないものは、その時点で閉じられてしまう。わざわざ図書館を経由して取り寄せようという人は、特に若い人や院生とかではないですよ。ということは、ネットに載っている情報によって研究が作られていく。だからそもそも論もネットに載っていることは大事。

小塩：いま Google で自分の論文が何本引用されて

いるかわかりますからね。研究者の方も、論文がオープンになっていなくても最終原稿をどんどんアップしてしまっている。

渡邊：著者本人が印刷された論文をPDF化して挙げるのはまさにグレーゾーンで、俺はやっているけれど、専門家も意見が分かれる。ジャーナルについては学会誌は学会が、商業誌であれば出版社が保持しているが、著作人格権自体は移動していないので、その中に自分が発表した論文をPDF化してアップロードすることが含まれるかどうかという議論は延々とされている。小説だと明らかにダメなんだろう。いくら絶版になっているからって、自分の小説を全部PDF化して自分のウェブページにアップロードしてっていうのはたぶんだめだよ。部分的な引用だとかなり広いグレーゾーンがあるだろうけど。

我々学者としてはコピーされ放題でも全然困らないんだよね。引用さえしてくれれば、コピーされても全然かまわないし。今回考えているそもそも論なんて、引用もせずにコピーされたっていい。実際けっこうコピーされているんだよ。先生もやってみな。自分の論文のコアになるような文章をそのまま検索してみると、けっこういろんなところに載っている。俺だってあるんだから。昔の『心理学評論』の論文のけっこうコアな、この論文にしか書いてないような書き方でこの論文にしか書いていないようなことを書いてあるのを文字通り検索すると、2つ、3つと出てくる。

小塩：けっこう気づくときありますよ。書いた論文にそっくりな文章が、1字1句同じじゃなくても構造的に同じようなものが出ている。

渡邊：絶対に自分しか書くわけない、というのがあるからね。我々学者の立場からすると、それもまあ読まれているってことかという割り切り方ができてしまう。書いたものでいただいているお金で食べているわけじゃないから。

小塩：紙媒体だと、自分と査読者くらいしか読まないとか。

渡邊：3人ないし4人ね。

■ 分野の違い

渡邊：査読の問題には分野の違いの問題もある。学

会メンバーの良心として、頼まれたら、断ったら困るだろうな、とってしまうから引き受けるのだけど、本当にわからないのがある。『質的心理学研究』⁽⁸⁾などはもっと大変で、心理学以外の分野からも投稿されるから、通読してもまったく意味がわからないことがある。私には意味がわからないので、と言って返したのがある。もう1人の査読者の人はちゃんと読んで、意味がわかって審査していたみたい。だから査読者を変えてくださいって言って、変えてもらったんだけど、やっぱり別の分野とでは書き方が違うものね。

それこそ法律の『判例時報』⁽⁹⁾とかの形式で書いてこられても、我々がそれを論文として評価することはできない。若い人はすぐに「心理学の枠にこだわらないで」とか、「学際的に」とか、「心理学でなくていい」とかいうけど、向こうが認めてくれないよ、あなたのこの論文は心理学の書き方で心理学のことしか書いていないので、こんなの他の分野の人が読んで意味がわからないんだよ、ということがわかっていないから、それこそAPAスタイル⁽¹⁰⁾で論文を書く業界としかつき合っていないから、そんなことが簡単に言えるのであって、APAスタイルで論文を書かない領域とぶつかったら、いきなりわけがわからないことになる。

前に測定の妥当性の話を化学者としたんだけど、全然話が通じなかった。なぜ通じないかというと、彼らは機械で測る。機械の妥当性はア・プリオリなんだよね。ガスクロマトグラフィーで成分が出てくるんだけど、俺が「これが合っているかどうか……」って言ったときに向こうは「いや、これは定期的に調整しているから大丈夫ですよ」と。これが典型的な分野の違いという話じゃないんだけど、機械の測定の話というのはその分野の人にとっては機械がちゃんと調整されているかどうかの問題で、きちんと調整されている機械は合っている。もちろんそれはその機械が開発される過程で何度もいろいろな形で、我々がいう併存的妥当性みたいなものが繰り返しチェックされて、この機械が大丈夫だということになっている。この1台だけ測定が間違っているというのは、それは追試するからいいの。機械が壊れてっていうのは実際にあって、論文が出るんだけど、追試できないことがあるらしい。

■ 文献・注

(1) ミシエル (W. Mischel: 1930-) : 1960年代、パーソナリティの状況論に関する研究で学界にインパクトを与えた。主

- 著に『パーソナリティの理論——状況主義的アプローチ』、『マッシュマロ・テスト——成功する子・しない子』など。
- (2) 日本臨床心理学会編 (1979). 『心理テスト——その虚構と現実』現代書館
- (3) 戸川行男 (1903-1992) : 臨床心理学者。早稲田大学名誉教授。
- (4) 1990年頃、渡邊芳之と東京都立大学の同期だった佐藤達哉 (現・立命館大学教授) とが血液型性格判断についての研究を行っていた。
- (5) 千里眼事件とは、1910年頃に御船千鶴子 (1886-1911) が千里眼能力で透視ができるとマスメディアを通じて紹介され、大きな話題となり、公開実験などが行われた事件。当時東京帝国大学助教授であった福来友吉 (1869-1952) など複数の研究者が後押ししたが、最終的に千里眼は否定された。
- (6) 渡邊芳之編 (2007). 『心理学方法論』朝倉書店
- (7) CiNii とは、国立情報学研究所が運営する学術情報のデータベース。
<http://ci.nii.ac.jp/>
- (8) 『質的心理学研究』は日本質的心理学会発行の雑誌。
<http://www.jaqp.jp/shitsushinken/>
- (9) 『判例時報』は判例時報社発行の雑誌。
- (10) APAスタイルとは、アメリカ心理学会 (American Psychology Association: APA) が定めている論文執筆のガイドラインのこと。
アメリカ心理学会著 (前田樹海・江藤裕之・田中建彦訳) (2011). 『APA論文作成マニュアル [第2版]』医学書院 (2010年発行の原著第6版の翻訳書)

Section 3

科学と政治・倫理

渡邊：そうそう、再現性の問題って一貫性問題と同じことだと気がついてからすぐわかってさ、同じなの。再現性の問題も、きっとみんな言い出すよ、3割でいいって。30%で何が悪いんだって。ミシエルは性格の一貫性の問題に関して、そもそもパーソナリティは30%ぐらいのものだ、と言っちゃったわけだ。今回の再現性の話も、そもそも社会心理学の実験なんてそんなもんだ、と。これは冗談で言っているんじゃない、本当にそもそも社会的行動を実験場面で調べることがどういうことなのか。社会心理学の黄金時代の実験の意味って何だったのかと。それは端的に言って、少なくとも一度はこういうことが起きた、それもそれなりにコントロールされた状況で人為的にそういう現象を引き起こすことに成功した、そしてそれが客観的に記録されたということ。

再現性が30%だとして、100年の歴史の中で3割の確率でそれが起きたら大変なことだ。ナチス・ドイツのユダヤ人虐殺の再現性がどのくらいかという話だよ。真面目にさ。21世紀ももう二十何年経っているけど

100年の間にナチス・ドイツの虐殺みたいなことが30%くらいの確率で再現しますよ、となると、オイオイどうするんだ、ということになるじゃない。

これもさっきの話とつながるわけで、ミルグラム⁽¹⁾もそうだしアッシュ⁽²⁾もそうだし、あの時代のユダヤの血を引いている心理学者たちは、こういうこと人間ってときどきやるんだぞ、またやるぞ、って言いたいわけだ。最初にイデオロギーがあるわけです。特にあの頃のアッシュがいたニューヨーク市立大学とかは、ドイツから逃げてきた学者を雇って作った大学で、そこでそういう研究がされた。ミルグラムはアッシュの弟子だからアッシュに直接習っている。自分も東欧から来たユダヤ系の移民の子供なんだよね。少し前にミルグラムの実験の詳しい本⁽³⁾が出たでしょ、あれにけっこういろいろ書いてあって面白いよ。

まず主張すべきイデオロギーがあって、そのイデオロギーのデモンストレーションとして実験がされている。それこそ監獄実験⁽⁴⁾だってそう。監獄実験は再現性があるそうだけど。デモンストレーションの中でも強いやつは再現もするんだろう。そういう意味では、再現するっていうのは社会的なインパクトも大きいんだよね。だからミルグラムの実験を見た人は、あるあると思ったんだよ。いかにあるある、と言わせるか。それを映画を撮って見せたりした。映画を撮って見せるのも政治的な運動なんだよね。

そういうことを日本の心理学者は意識しなすぎ、というより意識しちやいけなかったんだと思う。いまは違って、いまの若い心理学者は政治的なこともけっこう言うよ。研究の前提になっている正義みたいなことを言う。佐藤達哉のところでは生存学という障害のある人たちの生存についての学問をやっていて、院生といろいろ議論しているときに佐藤達哉が言ったのは、この研究分野では正義を主張してよい、こうすべきだ、こうなるのが正しい、と言うべきだ、と。心理学全体でも臨床や障害の分野のウエートは確実に大きくなっていて、障害の分野では正義と倫理は明らかにある。障害のある人たちがもっと社会の中でノーマライズされた生活ができるかというのは、はっきりした正義でしょ。それを否定している臨床の研究ってないでしょ。もっと端的に言えば治らない方がいい臨床ってあるのか。ポジティブ心理学も結局そういうことだし。

俺はじつはピンと来ないんだよね、ポジティブ心理学って。小塩先生たちのダーク・トライアドみたいな方がピンとくる。だって健康な人たちって、心理学が研究をしなくても健康なんだよね。昔から、心理学は人様の不幸で飯を食っているってずっと言ってきたわ

けで。ポジティブ心理学の人は、それが嫌なのかもしれない。でも幸福な人はほうっておいても幸福だから、学者の人がそれに口出しをする必要があるのだろうか。

小塩：ただ、幸福感は社会制度や政治と結びついていてくるんですよ。

渡邊：おそらく、みんなに幸福だと言わせる心理学になっている。世界で一番幸福度が高いのはデンマークだっていうんだけど、俺デンマークに一度行ったときにその社会の裏の面みたいなもの見せつけられちゃって、あれってみんなが幸せだと言わされる社会だよ。みんながこれがいいことだと共有しているんだよ。独裁政権でそれが強制されているわけじゃなくて、みんなが自発的に我々の社会はいい社会で優れた民主的な市民社会で、この社会で暮らすことが一番幸せなんだ、と思っている。難民もどんどん受け入れて。ただデンマークで一番感じたのは、市民としてのメンバーシップを手に入れるのがすごく難しい社会ですよ。例えば、家の庭はみんなきれいにしておかなければいけない。自分の庭だからって汚くしていると、近所の人に叱られる。公共の場では子供は泣かないようにしつけられている。犬もほえない。

小塩：犬はほえないですね。

渡邊：移民の人たちがいるでしょう、特にアジアの移民の人なんかは私たちと感覚が近いから、子供もじゃんじゃん泣かせるし犬もほえさせるんだけど、俺が見たのは、バスの中で子供が泣き始めて、いつまでも泣き止まないとバスが急に止まって、運転手が立ち上がって、ワーワーと言うわけ。そうするとアジア系のお母さんが片言のデンマーク語でワーワーワーって言って降りていった。降ろされちゃう。だから日々の生活の中で、お前はこういうことができているからお前にはこの市民社会のメンバーシップがないんだぞ、と。

こういうメンバーシップのイメージを英米はこれから強めてくるんじゃないか。合法的な移民の排斥みたいなことができるよね。これじゃあ暮らしにくいから、結局出ていってしまうよな、と思った。どんどん受け入れて、国際社会に対してはわが国は難民を受け入れていきますと言って、難民は暮らしにくいからオランダとかに逃げていく。

あのへんの難民の人たちは最終的にはオランダに逃げて、アムステルダムで子供は泣き放題、犬はほえ放

題の生活に戻る。俺たち日本人もデンマークから飛行機に乗ってアムステルダムに着くとホッとする。汚くて乱雑で。デンマークの社会も本来は具体的に特定の人たちを排斥する仕組みとしては作られていないはず、公式には。でも結果としてそうなっているでしょ。

むしろ心理学が政治的であっていいというなら、そういうのを糾弾したいな、俺としては。そういう心理学ってあるのかな。俺が危惧しているのは倫理学や人文諸学が英米の価値観のメッセンジャーにどんどんなっているでしょ。ポジティブ心理学みたいなものにもその傾向はあるのかも。要は何が幸せかを英米の価値観で、科学として、サイコロジージャなくサイコロジカル・サイエンス（心理科学）として示したい。

そうすると再現性がなくては困るんだろう。政治目的でかつそれをサイエンスだと彼らは言っていて、これが宗教だったらダメなんだろう。宗教だったら拒否できるけど、サイエンスは世界中で誰も拒否できない。それはすごく危ないと思う。データをとる文系の学問が、具体的な正義や倫理を主張し始めることにはもうちょっと警戒してもいいと思うし、それ危ないんじゃないのって言えるのは心理学者だけじゃないか。倫理学者はどんどんやり始めている。倫理学も若い人は業績が論文の本数で数えられるようになると、国際誌になるでしょ。英米のジャーナルに載る論文は、英米的な価値観が持ち上げたものしか載らない。まずいよな。でもこんな話、発表できないよな。

小塩：文化比較もそうですね。男女のことも、先日『パーソナリティ研究』に、私も著者に入っている男女のセルフ・エスティームのメタ分析論文を載せてもらいました⁽⁵⁾。その論文の考察には書いていなかったのですが、男女差が日本は少なくなっていて、男女差が少ない国って女性の社会進出が遅れている国なんです。国際比較で見ると、他のインデックス（指標）で見たときに女性の社会的地位が低い国ほど男性と女性のパーソナリティ差が小さい。その中で安住しちゃうというか、比較対象が自分の周りだけになっちゃってあまり差がなくて、男女平等の国ほど差が明確に出る。

渡邊：国際比較はそこが大事なんだよね。心理学者はすぐに親の養育態度だとかそういう話にしちゃうからいけない。社会が違うからそこも違うわけで。人間の性格って社会が作っているというすごく大きな問題がある。ただ、社会が作っているというのも「社会脳」だっていう話になって、人間の社会性の生得性を

言うのがみんなすごく好きになっているから。そりゃ生得性はあるに決まっているんで。

心理学者は昔から、例えば社会的欲求のマレー⁽⁶⁾だとかをいま読み直してみると、ある程度の生得性をイメージしている。親和欲求を我々は生まれつきもっているし、もっていれば適応的だからそうなっているのは当然なんだけど、そこから量の概念がどうかを見ないといけない。ネットでも言うじゃない。放射能があるから危ない、ないから安全じゃなくて、このくらいあったら危ない、このくらいだったら安全ってことがある。そういうことって他のこともみんなそう、生得性は程度の問題に決まっている。心理学者はわかっていて話しているんだけど、結局放射能の問題も政治の問題になるとあるかないかになってしまう。ここは住んでいい、ここは住んじゃいけないとゼロイチになる。だから、政治や倫理や正義の問題になるとゼロイチになる。いろいろな心理学的な特徴の生得性の問題も、心理学者にとっては量の問題や程度の問題なのが、どこかでゼロイチになるわけ。

それこそ、これからの社会でどういうふうに起きるかかわからないけれど、ナチスのユダヤ人虐殺のときはユダヤ人がもっている特徴が「科学」の名をもってすごく攻撃された。その頃はユダヤ人の外見的特徴に関する研究だけでなく、行動というか精神病理に関する研究もすごくされているんですよ。例えばユダヤ人の方が当時の「早発的痴呆」にかかりやすいだとか。そういう「科学」がナチスの政策を後押ししているわけ。そういうことがまた起きるよね。それももっとサイエンスな形で。これは差別じゃないんだ、科学だと。だからサイエンスにも警戒しなくちゃいけない。

再現性の話でも、みんな心理学は自然科学みたいな科学にならなきゃいけないということをまったく疑っていない。心理学が科学、それも自然科学になることが目的になっているんだ。人間行動を扱う自然科学になりたい、と。それでできることはすごく少ないよ。いま心理学者がもっているテーマの7割くらいはダメになる。役に立つ問題からすれば、残らないものの方が世界から見たら役に立つこともある。例えば、生物学の再現性は物理や化学よりずっと低いと思うんだ、特に生態学とかはああいう基準で行ったらせいぜい6割とか、心理学の実験系のテーマは6割くらいでそれは当たり前でハードを扱っているものはそのくらいになる。ハードを扱うものしか残れなかったら臨床心理士や公認心理師なんてできなくなってしまう。どうするつもりなのかな。

1940年代に実験心理学が行動主義でやったのと同

じ失敗をすることになる。また行動主義をやるのか、という。行動主義ってなんで起きたんでしたっけ、という話なんだよ。行動主義の悪口をいろいろ言いますけど。再現性や科学になるっていうことにこだわっていると、新しい行動主義の時代が来るだけです、と。行動分析みたいなセクトを作って、これは心理学じゃないんだ、行動分析だ、と。同じだよ、心理学じゃなくて心理科学だっていうのとさ。本当にナイーブで、なぜナイーブになるかという、歴史を知らないから。歴史を知っていれば、前にも同じことがあったでしょ、と言えるし。パーソナリティ分野についていえば、ミシエルの問題と相当な部分同じ問題なんです、これ。当のミシエルはいまはそうは思っていないだろうな。なにしろミシエルは、自分のやったことの意味を全然わかっていないんだよ。そこがすごい。そこが天才。天才ってそうなんだよ。

渡邊：今度の対談は、俺は日本パーソナリティ心理学会の理事長だからおじいちゃん代表と、中堅の小塩先生とで、パーソナリティ心理学のそもそもの話をしますよ。パーソナリティ心理学のそもそもの話をするうえで、社会との関係は考えざるをえないから、1回目は変わるもの変わらないもののお話で、いろいろな論点を提示して、その後その論点の中からいくつかを議論していく。例えば脳の話になったら、小塩先生は脳と結びついている最近の研究をたくさん知っているから。そういう話をしたい。

文献・注

- (1) ミルグラム (S. Milgram : 1933-1984) : 社会心理学者。普通の人間が権威者の指示に従って他者を傷つける行動を起こしようという有名な実験を行った。この実験はナチス・ドイツの虐殺に関わったアドルフ・アイヒマンになぞらえてアイヒマン実験とも呼ばれる。
- (2) アッシュ (S. Asch : 1907-1996) : 同調実験で有名な社会心理学者。
- (3) プラス, T. (野島久雄訳) (2008). 『服従実験とは何だったのか——スタンレー・ミルグラムの生涯と遺産』誠信書房
- (4) 監獄実験とは、ミルグラムの弟子であるスタンフォード大学のジンバルドー (P. Zimbardo : 1933-) が行った実験。模範の監獄において、看守役と受刑者役に分けて役割を演じさせたところ、非常に強い影響が出てしまい、途中で中止することとなった。ジンバルドーによる著書『ルシファー・エフェクト——ふつうの人が悪魔に変わるとき』に詳細が記述されている。
- (5) 岡田涼・小塩真司・茂垣まどか・脇田貴文・並川努 (2015). 「日本人における自尊感情の性差に関するメタ分析」『パーソナリティ研究』 24, 49-60.
- (6) マレー (H. A. Murray : 1893-1988) : 社会的欲求の研究で著名な心理学者。

著者

渡邊 芳之 (わたなべ・よしゆき) :

帯広畜産大学人間科学研究部門教授。主要著作・論文に、『性格とはなんだったのか——心理学と日常概念』(新曜社, 2010年), 『心理学方法論』(朝倉書店, 2007年, 編著), 『心理学・入門——心理学はこんなに面白い』(有斐閣, 2011年, 共著) など。web サイト (<http://www.obihiro.ac.jp/~psychology/staff.html>), twitter: @ynabe39.



小塩 真司 (おしお・あつし) :

早稲田大学文学学術院教授。主要著作・論文に、『Progress & Application パーソナリティ心理学』(サイエンス社, 2014年), 『性格を科学する心理学のはなし——血液型性格判断に別れを告げよう』(新曜社, 2011年), 『はじめて学ぶパーソナリティ心理学——個性をめぐる冒険』(ミネルヴァ書房, 2010年) など。web サイト (<http://www.f.waseda.jp/oshio.at/>), twitter: @oshio_at.



* サイナビ! (URL 参照) に掲載された記事をもとに作成しています。

<http://chitosepress.com/category/psychology-navigation/>

* 記載された内容の著作権等の知的財産権は、著者または著者に権利を許諾した者に帰属します。

* 購入者・利用者は印刷・配布して使用することができます。

* CC BY-ND ライセンスによって許諾されています。ライセンスの内容を知りたい方は <https://creativecommons.org/licenses/by-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

